

## はじめに

松本大学は、本年（2005年）“完成年度”を迎え、学生も一年次生から四年次生までが在学することになり、キャンパスにもようやく大学らしい雰囲気が溢れてきました。“幸せな地域社会づくり”に貢献するという志を実現するために本学の教育・研究スタッフは、意欲的に活動に取り組んでいます。その活動内容は、毎年二つの定期刊行物「松本大学研究紀要」（1月）・「地域総合研究」（6月）を通して社会に公表されています。両方とも号を重ねる毎に重厚さを増していますが、これは取りも直さず、本学の教育・研究活動が年々活性化していることの証だと思えます。

「地域総合研究」は、松本大学地域総合研究センターの紀要ですが、今回で第5号を数えることになりました。本学（学部・短期大学部）の教員は全員本研究所の研究員でもあります。第一部には、これら松本大学地域総合研究センター研究員の研究論文が15篇と研究ノート1篇が掲載されました。第二部は、松本大学地域総合研究センターの2004年4月より2005年3月までの活動報告が（1）活動報告と（2）活動実績に分けて報告されています。第三部には、松本大学アニュアルレポートとして、すべての研究員のこの一年間の研究・教育・社会活動について詳細に報告されています。さらにエクステンションセンターと国際交流センターの活動報告がなされています。

一般的には、大学の教育の特色は、教育に関わるスタッフのそれぞれの専門的な研究活動と不離一体的なものだという点にあります。優れた大学教育は、優れた研究がベースとなっていることが必要不可欠な条件です。ところが、昨今、大学は教育機関だから教育が第一的なものであるということが強調され過ぎて、ともすると研究がないがしろにされそうな風潮が見受けられますが、これはむしろ大学教育そのものの存在価値を自己否定することになりかねません。従って、大学における教育が本物の大学教育であるためには、何時の時代でも、教員の専門的な研究活動はよい大学教育のために活発になさるべきではないのです。

本学の教育・研究活動の二つの発表誌が、年ごとに充実度を増していることは、取りも直さず本学の教育を担うスタッフ全員の本物の大学教育への志の高さの証だと思えます。

どうぞ松本大学が“幸せな地域づくり”にますます貢献できるために本誌がいささかなりとも役立てばこれに過ぎる喜びはありません。

みなさまの忌憚のないご批評、ご意見をおよせいただけますようお願いを申し上げます。

2005年6月

松本大学学長

松本大学地域総合研究センター長

中野和朗